

サルトルの「無神論的実存主義」：解説

*以下枠文及び表（次項）を先に簡略すると、以下内容が其處には記載されてゐる。

《神不在⇒「必然性からの脱落（即自・おのづからなる存在）」⇒「無」（「孤立した個體」「生の無意味で偶然的なでたらめ」）⇒「対自・みずからのための存在」⇒「不完全なる條件のもとに、ぼくたち自身の孤立した個體（孤獨）において、しかも全體につながり、自己完成をはたす」（P 187）⇒「主体性・投企・社会参加」》

<http://textview.jp/post/culture/22903>

《『NHK100分 de 名著 サルトル 実存主義とは何か』より》

*1945年の10月、パリでおこなわれた講演「実存主義はヒューマニズムである」。その講演を翌年出版した本が、『実存主義とは何か』である。

*「実存は本質に先立つ」とは。

この講演にはいくつかのポイントがあって、実存主義を説明するわかりやすい二つの定式が提示されています。

第一の定式が、「実存は本質に先立つ」。

第二の定式は、「人間は自由の刑に処せられている」。

「自由の刑に処せられている」というのは、「人間は自由に運命づけられている」という別の言い方をしてもいいでしょう。そこでは、「自由」と「運命」という逆説的な関係が暗示されています。

さて今回は、第一の定式について、少し考えてみたいと思います。「実存は本質に先立つ」とは、いったいどういうことなのか——。

「実存」というのは、現にこの世界に現実に存在するということ。他方「本質」とは、目には見えないもので、物の場合ならば、その物の性質の総体、要するに、どんな素材であるのか、それはどのようにつくられるのか、何のために使われるのか、といったことの総体です。

ここで例に挙げられているのは、ペーパーナイフです。その製造法や用途を知らずに、ペーパーナイフという物をつくることはできない。ペーパーナイフとはどういうものかを、あらかじめ職人は知っている。だから職人はその本質を心得ながら、ペーパーナイフという実際の存在、実存をつくる。つまりこの場合には、「本質が実存に先立つ」わけです。それはペーパーナイフに限らず、書物でも、机でも、家でも、みんな同じです。

では、人間の場合はどうか。もちろん神が存在して、神が人間をつくったと考えれば、ペーパーナイフとまったく同じことになる。神の頭の中にまず、人間とはどういうものかという本質があり、それから人間の実存がつくられるということでは、同じです。この「本質が実存に先立つ」という考え方は、実は18世紀になってからの無神論でも同じことです。18世紀は、ルソーなどに見られるように、「自然」を尊重した時代です。哲学者たちは「人間は人間としての本性をもっている」ので、「それぞれの人間は、人間という普遍的概念の特殊な一例である」と考えた。「本性」も「自然」も、フランス語では同じ「ナチュール」(nature)で、「ナチュール・ユメーヌ」(nature humaine)というと、「人間本性」すなわち「人間本来の自然なかたち」という意味です。この場合でも、人間の自然な本質が、個々の人間の実存に先立っているとしたわけです。

ところがサルトルは、人間の場合はそうではない、と主張する。逆に「実存が本質に先立つところの存在」こそ人間である、と彼は宣言するのです。

* 「実存が本質に先立つとは、この場合何を意味するのか。それは、人間はまず先に実存し、世界内で出会い、世界内に不意に姿をあらわし、そのあとで定義されるものだということを意味するのである。(中略) 人間はあとになってはじめて人間になるのであり、人間はみずからがつくったところのものになるのである。このように、人間の本性は存在しない。その本性を考える神が存在しないからである」(『実存主義とは何か』)。

人間はまず先に実存し、したがって、自分の本質というのはそのあとで、自分自身でつくるものだ、というのがサルトルの考え方です。「人間はみずからつくるところのもの以外の何ものでもない」、これが「実存主義の第一原理」です。

そしてそこから、みずから主体的に生きるという「主体性」の概念が出てきます。みずからをつくるということは、未来に向かってみずからを投げ出すこと、すなわち、みずからかくあろうと「投企」することだ、と。この耳慣れない「投企」という概念は、フランス語の「プロジェクト」(projet) です。普通は「計画」という意味ですが、「前へ(プロ)／投げる(ジェ)」というニュアンスがわかるように、哲学用語としてそう訳されているのです。

「主体性」や「投企」という概念、そこから何かを「選択」する「自由」という概念、あるいは自分で選ぶということに伴う「責任」、そのことへの「不安」、また自分ひとりで決めることの「孤独」と、一連の概念がずっとつながって、そこに実存主義という考え方の基本的図式が浮かび上がってきます。

《フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』「サルトル」から》

* 人間があらかじめ本質を持っていないということを意味する。このことについてサルトルは「人間とは、彼が自ら創りあげるものに他ならない」と主張し、人間は自分の本質を自ら創りあげることが義務づけられていった。人間は自分の本質を自ら創りあげることができるということは、例えば、自分がどのようにありたいのか、またどのようにあるべきかを思い描き、目標や未来像を描いて実現に向けて行動する「自由」を持っていることになる。

《ヤフー知恵袋から》

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1196500386

* サルトルの人間観は、人間という存在があらかじめ何者になるか決まっておらず、何者にもなる可能性があるという意味で自由であり、「人間は自らをつくるところ以外の何ものでもない」と言ったのでした。そういった意味でサルトルにとって人間とは、常に、ある自分を乗り越えて、無である未来に対し自己の可能性を「投企」していく(=投げ出して創造していく)存在であるとしたのでした。そのためサルトルは、「実存は本質に先立つ」と言ったのです。要するにサルトルにとって、人間の本性(=本質)は存在せず、その後にその人が自ら選択した行為によって、その人が何者であるかが定義されたのです。

尚、上枠文中の重要文(以下表左項に轉載)について、恒存は評論『サルトル』では、解りにくい哲學用語は使はず、「小説『嘔吐』白井浩司譯引用」で右項の様に記述してゐる。『第三の椅子』を理解するには、どうしても評論『サルトル』が必要となり、さうなると、更に恒存用語と哲學用語との対比が必要となつて来る。その爲煩雑ではあるが以下表でそれを「左右対比」にしてみた。

<p>以下、無神論的實存主義なる「サルトル思想」 (各種解説利用)。</p>	<p>以下、恵存評論文による左記項目の説明及び批判。 「 」内が恵存文。() 内は吉野注。</p>
<p>神不在即ち、「人間は世界内に不意に姿をあらわし、そのあとで定義されるものだ。人間の本性は存在しない。その本性を考える神が存在しないからである」⇒「即自」⇒「それ自体は無意味な物質的素材のあり方」。</p> <p>*「サルトルの人間観は、人間という存在はあらかじめ何者になるか決まっておらず(即自)」⇒「何者にもなる可能性があるという意味で自由であり、「人間は自らをつくるところ以外の何ものでもない」(対自)と言つた」。</p>	<p>左項「即自」に對する恵存用語(白井浩司譯引用)は「おのづからなる存在」。</p> <p>*「なまのままの存在をサルトルは『おのづからなる存在』と呼んでゐる——まさにそれが人間の實存なのだ」(評論『サルトル』全二P 141)と。</p> <p>*「おのづからなる存在」(つまり「即自」)・・・神不在と言ふ、「必然性からの脱落」「ごまかしやうのない(意味づけの出來ない)個體の孤立(孤獨)をサルトルは洞察してゐる」(『第三の椅子』P 184)。</p> <p>「まさにそれが人間の實存なのだ」(評論『サルトル』全二P 141)と。</p>
<p>*「實存が本質に先立つところの存在」こそ人間である、と彼は宣言するのです。・・・『人間の本性は存在しない』・『實存は本質に先立つ』・「(人間)存在の偶然」。</p>	<p>左項に對比する恵存文・・・</p> <p>*P 184 「人間は——個人は、まづ存在(實存=事實存在)する。意味もなく、他との關聯もなく、まづ存在する」⇒「(つまり)自然(人間も含む)にはその現象のすべてのあひだには、なんらの脈絡も關聯(意味づけ)もない。即ちあらゆる意味づけは人間があとから勝手につけたメタフィジック(形而上學)に過ぎぬ」⇒「サルトルは個人の存在を意味づける時間的、空間的な全體性(C)を破壊してみる(神不在による意味づけや本質の喪失。存在の偶然)」(即ち、『實存は本質に先立つ』)。</p>
<p>[サルトル思想(簡略)]</p> <p>*即自⇒無(「人間の本性は存在しない。その本性を考える神が存在しないからである」・孤独(「自分ひとりで決めることの孤独」)⇒「対自」(⇒次項「投企」即ち「社会参加」))。</p>	<p>左項に對比する恵存文及び批判文。・・・</p> <p>*「おのづからなる存在(即自)」と「みずからのための存在(対自)」と言ふ「この二つの實存のあひだにあつて前者から後者への轉換を可能ならしめるものが、ほかならぬ無なのだ」(『サルトル』P 142下)。</p> <p>*「既存の外部的なもろもろの理想(自己を奉仕せしめる人類や社會の目的)は、肉體化された自己の理想とはなりえず、あくまで自分の外のもの」⇒「ひとたびこれを<u>無の背景のまへ</u>におとしこみ、それら<u>一切を虚無のものとして却けてしまつた</u>あとに、ふたたび、自己以外の、自己以上の、そして自己より大いなるものとして、それらの理想が採りあげられる」⇒「ばからしいともいへる。なぜなら實存主義が大仰に騒ぎ立ててゐる事實は、もつとかんたんにいつてしまへば、現實そのものの改變ではなく、おなじ現實のもとにあつて、ただ、今まで無自覺(おのづからなる存在)であったのをこれからは自覺的(みずからのための存在)に生きろといふにすぎない。それは現實を處理する新しい方法ではなく、むしろ既存の現實に屈服する</p>

	<p>方法ですらある」（『サルトル』全二P 143）。</p> <p>*「一切は無であるのもかかはらず、サルトルはこの無を超えて、しかも無を媒介として、愛や正義や責任を導きいれてくる。それが『みずからのための存在』（対自）である」⇒更に重要文は参照P 143下段。</p>
<p>⇒対自（みずからつくる）・・・</p> <p>*対自とは、自己に対して自覺的に、の意。即自 (an sich) の直接状態から発展した第二の段階をいう。自己自身に關係し、自己を対象化するあり方。</p> <p>*「自分の本質というのはそのあとで、自分自身でつくるものだ、というのがサルトルの考え方です。「人間はみずからつくるところのもの以外の何ものでもない」、これが「実存主義の第一原理」です。</p> <p>そしてそこから、<u>みずから主体的に生きる</u>という「主体性」の概念が出てきます。<u>みずからをつくる</u>ということは、未来に向かってみずからを投げ出すこと、すなわち、みずからかくあろうと「投企」することだ、と。</p> <p>*サルトルは「人間とは、彼が自ら創りあげるのに他ならない」と主張。</p> <p>*サルトルの人間觀は、人間という存在はあらかじめ何者になるか決まっておらず、何者にもなる可能性があるという意味で自由であり、「人間は自らをつくるところ以外の何ものでもない」と言ったのでした。そういう意味でサルトルにとって人間とは、常に、ある自分を乗り越えて、無である未来に対し自己の可能性を「投企」していく（=投げ出して創造していく）存在であるとしたのでした」（ヤフー知恵袋）。</p>	<p>左項（対自）に對比する恆存用語は「みずからのための存在」。</p> <p>*「『存在することをみずから意識する存在』としての實存」、それは「まさに人間的實存」（『サルトル』P 142）なのだと。つまり、ただの肉體的實存である「おのづからなる存在」ではなく、「おのづからなる存在（即自）」⇒「無」（「孤立した個體」「生の無意味で偶然的なでたらめ」）⇒「<u>みずからのための存在（対自）</u>」と言ふプロセス上の、「みずからのための存在（対自）」、「それこそまさに人間的實存」なのだと。</p> <p>*「サルトルも『おのづからなる存在（即自）』にたいして、『みずからのための存在（対自）』を用意する。そしてこれこそ人間にのみ許された、人間的なる實存なのだ」（『サルトル』P 141）。</p>